



TITLE:

<学生の声> 「モントリオールの歩き方」

AUTHOR(S):

木村, 知玄

CITATION:

木村, 知玄. <学生の声> 「モントリオールの歩き方」. Cue 2016, 35: 63-63

ISSUE DATE:

2016-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/210148>

RIGHT:

学生の声

「T 型人材の縦横比」

情報学研究科 通信情報システム専攻 情報回路方式分野 博士後期課程3年 栗 野 皓 光

最近、世間ではジェネラリストの育成が重要視されているように思う。研究者にも、自分の専門以外について広くカバー出来るような「T 型」人材が望まれているようである。T 型と言っても一世を風靡した乗用車のことではない。T の横棒が周辺知識への理解を、縦棒が専門性の深さを表現しているとのことだ。要素技術の進歩が飽和し始め、異なる技術の組合せが求められ始めた今の様な時代には、ある種の何でも屋さんが求められるのであろう。

では、T の横棒と縦棒はどのように伸ばしていけば良いのだろうか？研究者と言うからには、1 つのことを突き詰めることも重要であり、突き詰めないと見えないことも当然出てくる。同時に、横の広がりにも気を配れ、というのは中々難しい要求であらう。僕は、学生で居られる期間は T の横棒を伸ばすことに注力したほうが良い、と考えている。柵にとらわれずに、色々な分野を“摘み食い”させてもらえるのも、(学費を払って時間を買っている) 学生の特権では無いだろうか。

「ちはやぶる 神代もきかず 龍田川 からくれなゐに 水くくるとは」在原業平が紅葉の美しさを詠んだ歌である。「ちはやぶる」という枕詞の意味には諸説あるらしいが、某かるた漫画には、独楽の回転に例えた説明が紹介されていた。「ちはやぶる(千速振る)」は高速回転する独楽の微小な振動のことで、まるで静止しているように見えながら、周囲に偏りなく力が集中している様子を表すらしい。いつの日か、自分だけの安定した軸を持った「ちはやぶる」研究者になれる日を目指しつつ、残り少ない学生の間に、思う存分、摘み食いしてやろうと企んでいる。

「モントリオールの歩き方」

工学研究科 電子工学専攻 電子材料物性工学分野 博士後期課程3年 木 村 知 玄

私は『京都大学大学院工学研究科馬詰彰奨学寄附金』の支援を賜り、博士課程3年次の9月から6週間、カナダはモントリオールにあるマギル大学 (McGill University) での海外研修を受けさせていただくことができました。私は滞在の間、物理学科の物性物理に関する研究室にお世話になりました。このマギル大学の物理学科はノーベル賞も受賞した原子物理学の大家であるラザフォード氏の名を冠す建物に入っており、毎週開かれる著名な研究者を招いてのセミナーへの姿勢からは、その名に恥じない学生たちの学問への熱心さが伺えました。

博士課程での研究は自分用にカスタマイズした装置を用いて実験を行っているため、当初はこのような海外研修で直接的な成果、または自身の研究へのフィードバックとなるような寄与は難しいと考えていました。しかし、先方の研究者が取り組んでいる内容の一つに私にも関係するものがあったため、まず理論や数値解析の面から対応できないか考えました。このことを通して、先方の研究者のバックグラウンドである物理学とは異なる、電気や制御面からの考え方が、活き活きとした議論を生み出しました。本来研修をする際、事前に内容を決定しておくことが短い期間で研究を進める鍵となりますが、このようにその場で議論しながら新しい視点を生み出すことも、非常に「研究」らしさ溢れているということを感じたものです。

この海外研修で私の得たものは、研究成果でなく、英語力でもなく、「対話」ではないかと考えています。これまでの研究生活は基本的に一人で行うものであり、自身で解決できることが多かったため研究に関して人と議論する機会は少なかったように思います。しかし、たとえ煩雑であっても、その時は無駄と感じるとしても、何かが進んだり変わったりするきっかけになることは間違いありません。それには言語は関係ないのです。

最後に、モントリオールは歩くだけでもとても面白い街です。少し歩けば繁華街から学生街、旧市街のたたずまいや、すぐそばにモンロワイヤル山があります。異国の地で歩き、見て、何かを感じればそれが経験になるということを思わせてくれた渡航となりました。